

進路先への移行

2015. 01. 30.

高等部 学部長 奥西 美子

これまでの情報移行

京都市の地域制総合支援学校の定型書式

抽象的な内容 → 具体的に記述

進路担当の引き継ぎ → 担任の引き継ぎ

生徒が進路先で定着できない

進路先からの情報の問い合わせが増える

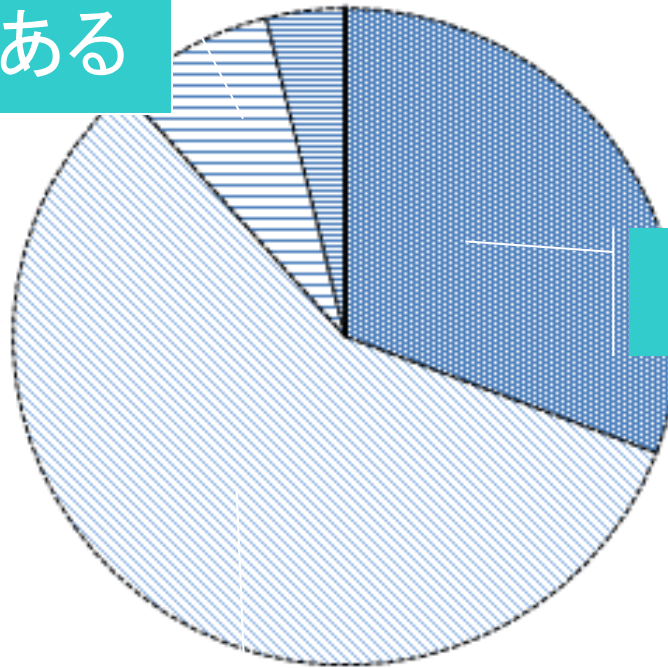
移行情報のアンケート実施

- 情報移行の現状を知りたい
- 必要とされている情報を知りたい
- 過去2年に進路先となった事業所（福祉・企業）に実施 → 66%の回収率

さまざまなことが見えてきた

調査書による情報移行

不十分である

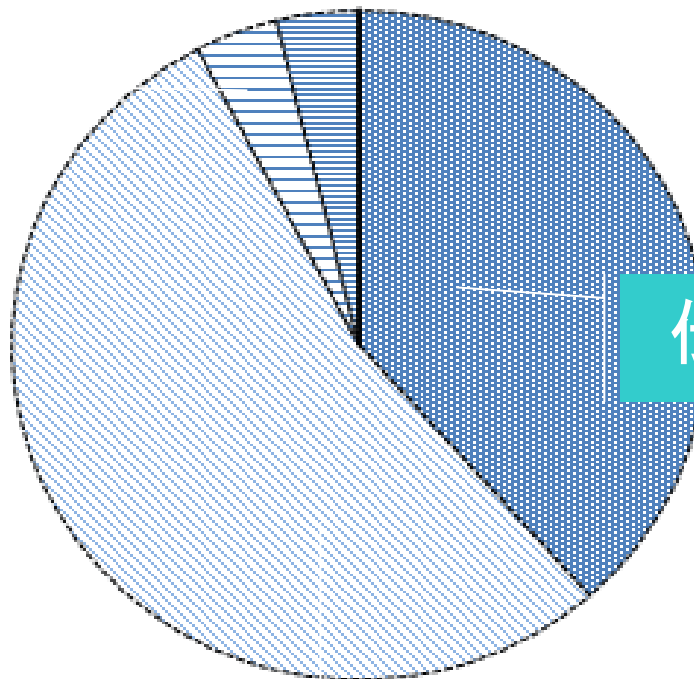


伝えられている

伝えられていないこともある

担任引継による情報移行

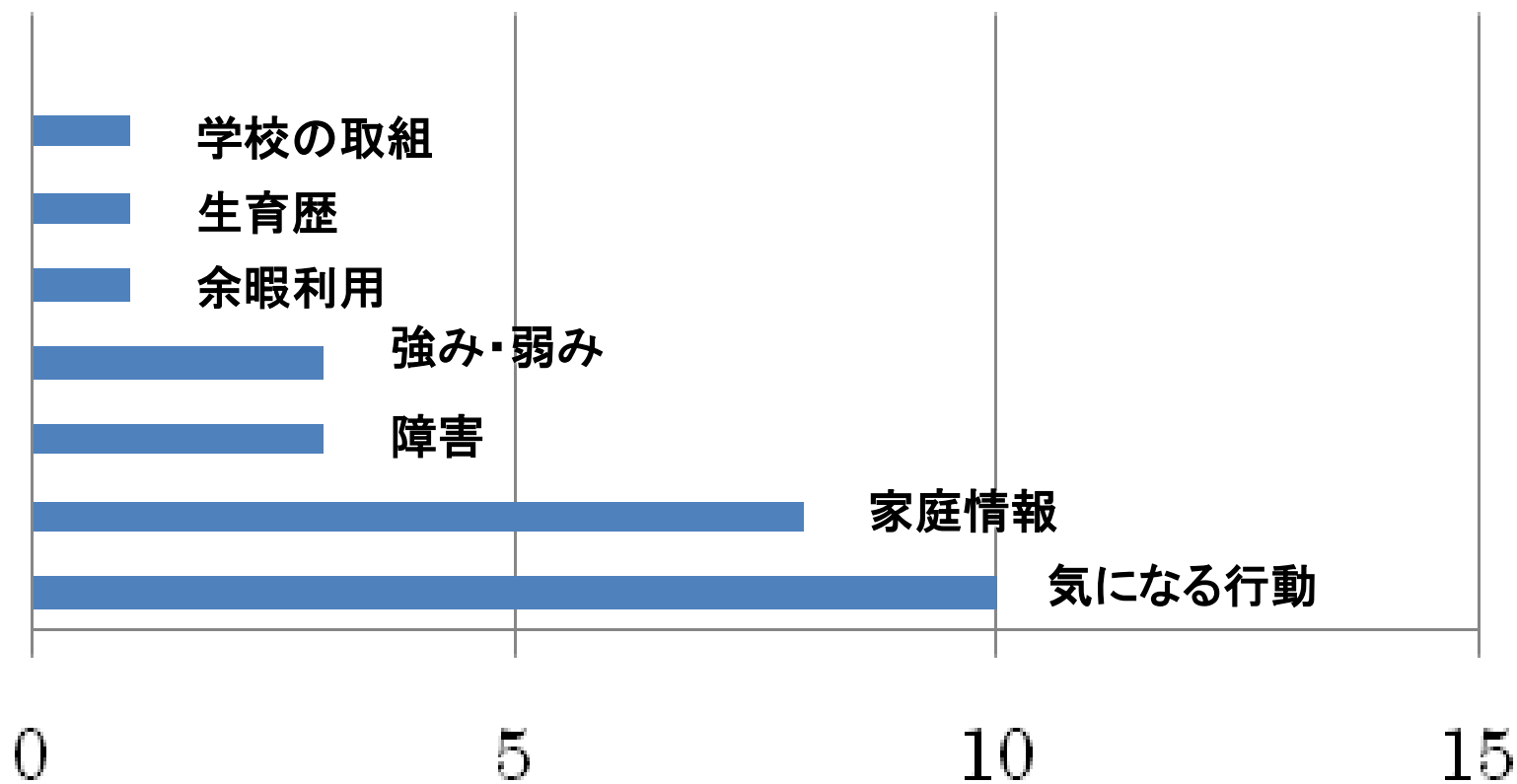
不十分である



伝えられている

伝えられていないこともある

伝えられていない項目



今後に求めること

- 気になる行動 ⇒ エピソード, 具体的対応
- 家庭情報 ⇒ 後から分かることが多い
- アフターケア ⇒ 1年の間に何回か必要
- 実習日数を増やす ⇒ 十分なアセスメント
- 学校生活の見学 ⇒ 一日の流れ, 食事
- できるの過程 ⇒ そこに至る取組

私たちが中学部・中学校に求めるものと同じ

移行情報の改善

- 調査書の書き方を進路先の視点で
- 個別の包括支援プランの活用
(情報の更新を確実に)
- 担任引き継ぎで、取組の過程や成長の履歴
(できますシート・情報バンクの活用)

進路先との連携で、必要な情報を移行していく

気づかされたこと

- 学校内の人的・環境的要因のもとでの状況が記載されているので、実際の評価と異なる



- わたしたちが、進路先や社会を広く知る視点が、必要不可欠である